**説教20231119アモス書5：18-24マタイ25：1-13「十人のおとめ」**

**今日のイエス様の喩えは一読して、さてそれでイエス様は何をおっしゃりたいのかと、かえって思いが深まってしまうような話です。が、それはそれでよいのです。イエス様の愛がはっきりとくっきりと分かるのは、私たちがイエス様と顔と顔とを見合わせる、最後の最後の日、即ち、終末の時、主の日なのですから。**

**今日イエス様が私たちに対して語られるメッセージと言うのは実はわかり易いです。マタイ福音書２５章１３節の御言葉がそれです。お読みします。**

**「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」このイエス様の御言葉は、聞けば聞くほど、知れば知るほどに、イエス様からこの私に対する、情愛に満ちた熱い愛情が込められていることが分ります。イエス様は熱情の神様であり、この私を最後まで一途に愛して下さいます。ですから、この私が偶像に心奪われていく事、今日的な言葉で表現すれば、この私が、心を浮つかせて偶像に浮気をする事を嫌われて、決してそのことをお赦しにはならないお方です。ですからイエス様はこの私に、「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」といつも言い聞かせて、私の心がイエス様から離れて浮ついていく事を戒めて下さるのです。**

**私たちは、いつもイエス様を見つめて、イエス様を愛して、この地上の一歩一歩を歩んで行く方が幸いです。そうすれば最後の最後に訪れる主の日を、永遠の祝福の日として、私たちは迎えることが出来るでしょう。**

**それでその永遠の祝福の日である、主の日をお迎えしようとする私たちにとって、先ず大変わかり易い御言葉を、イエス様は話されました。今日の聖書箇所の前の章になりますが、マタイ福音書の２５章４９節になります。**

**「仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしているとする。」**

**悲しいことかな、ここに語られていることは、今の地上で暴力と乱痴気騒ぎに取り巻かれている私たち人間の実情を、イエス様は言い当てておられると思います。**

**そして、このような行いを続けていますと、私たちは決して、祝福された主の日を迎えられそうにはありません。アーメン。こんなことは当たり前のことで、私たちは今確信を持って、アーメンとイエス様に言い返すことが出来ることでしょう。**

**それでは、今日の聖書箇所である十人の乙女のたとえ話に聞いて参りましょう。**

**このたとえ話のわかりにくさは、次のような私たち人間の側の誤解に基づくことだと言えるでしょう。すなわち、「私はもともと愚かなので、イエス様がおっしゃるような賢い乙女にはなれそうにない。無理難題を押し付けるイエス様についていくのは辛いし、しかも戸を閉められて、入れないようにするような情けないイエス様はイエス様ではない」と言うような思いを抱いしまって、イエス様のこの御言葉を受け入れられないということです。**

**その様な誤解に注意しながら、イエス様の御言葉を聞いて参りましょう。**

**先ず、聖書の語る処の前提は、私たち人間はこの地上にあって、一人残らず愚かで、罪深いということです。しかし、聖書は、私たち人間をむために、この様に言っているのではなく、かえって、その愚かな者が、いつでもどこででも、その気になれば、賢い者へと変えられるのだということを言われているのです。**

**そこには、この今の実社会で判断されている賢さ／愚かさと、聖書が語る賢さ／愚かさとの違いがあります。**

**イエス様は、人間の所謂、頭のよさや、実社会におけるパフォーマンスのよさ、即ち、仕事で多くの実績を上げたとか、学問で後世に残る立派な業績を打ち立てた、といった人に目を向けて、その人をほめたたえることはありません。**

**勿論これらのことが、この世で必要がなく、意味がないことだとイエス様は言われてるわけではありません。しかし私たち人間が勘違いしてはならないのは、これらのことは全て、イエス様から与えられた物事であって、これらの良いものを与えられた私たちは、自分をほめたたえてはいけないということです。むしろ、これらの与え主であるイエス様を見つめて、イエス様に感謝と賛美を捧げるように私たちは、今ここに生かされているのです。**

**少々辛辣な聖書の御言葉を引用すれば、箴言には、自分を賢い者と思い込んでいる者ほど愚かな者はいない、と記されています。（箴言 26章 12節）**

**段々、聖書が語る賢さと、この世でみなされている賢さとの違いが明らかになってきましたが、それでは聖書が語る賢さと言うのは何でしょうか。それは私たちが、イエス様と言うまことの光に向き直って、その光に照らされて、その光によって心も体も明るくされて、命の泉であるイエス様と共に歩んで行くということです。**

**聖書が語る賢さについて、今は、この別府不老町教会の年間聖句に基づいて言い表してみましたが、その他にも様々に言い表すことが出来るでしょう。私たちが、自分の元々の愚かさや罪深さに気付いて、イエス様に向き直って、その愚かさや罪を打ち砕かれて、再び立ち上がらせられて、目を開かれて、イエス様のほうへ向かっていく、ということも又賢さの初めと言っていいでしょう。**

**箴言の初めには次の様に記されています。**

**主を畏れることは知恵の初め。（箴言1章 7節）**

**主を畏れることは知恵の初め、つまり、憐み深い主を常に見上げ、恐れ敬い、愛し続けるということこそ、私たちが知恵に目覚め、主イエスの救いの道を、足を滑らせることなく、確実に、一歩一歩、最後の主の日まで確実に歩み通せる賢い道だと、聖書は語っているのです。そしてその賢い道と言うのは、主イエスに立ち帰り、イエスを信じてイエスに従っていく誰にでも、公平に備えられるのだよと、聖書は語っているのです。**

**今迄、聖書が語る賢さとは、どういうことなのかについて語ってきましたが、次に、今日の十人のおとめのたとえ話の背後にある、時代背景について触れておかなければいけません。イエス様がこのたとえ話を語られた時代には、結婚式を挙げるにあたって、花嫁は必ずランプにともしびをともしながら、やって来る花婿をお出迎えしなければならないという決まりがありました。そして、その花婿のお出ましは、往々にして予期できないような真夜中になる、ということもよく起こった出来事であったようです。そして、婚宴の会場が、聖書に書かれてある通り、或る時間に戸が閉められて、その後に来た人達は、婚宴の中に入ることが出来なかったということも、ごく普通の成り行きであったようです。**

**とりあえずこの３つの時代背景を踏まえて置けば、イエス様の話が、よりはっきりと理解できるようになるでしょう。　花嫁は必ずランプにともしびをともしながら花婿をお出迎えしなければならないということと、花婿はよく時ならぬ真夜中にやって来たということと、婚宴の会場の戸は決められた時間に閉ざされる、という３つの事実です。**

**では、もし自分がこの時代に結婚式を挙げようとする花嫁だったとしたら、どうでしょうか。果たして自分は賢い５人の花嫁の様に、ランプと一緒に余分の油を壺に入れて準備して持っていく事が出来るでしょうか。こういった準備は当たり前で簡単なようで、いざその当事者となってみれば、意外に、ポカンと頭から抜け落ちているということが私たちには起こり得るのではないでしょうか。**

**例えば、ヴァイオリンを弾く人が会場に出かけて行って、いざ引こうとしたら肝心の弓を忘れていた、とか、絵を描く人が出かけて行って、いざ目の前の風景を書こうとしたら、肝心の筆を忘れていた、などということが起こり得ます。**

**世の中には、この様に弓や筆を忘れてしまう人もいれば、又、決して忘れることはないという人がいます。両者の違いはどこにあるのでしょうか。それは、その人がそれを心から喜んで行っていて、その心に迷いがなくて、一つの高みを目指してたゆまず歩んでいるかどうかにあるのだと思います。そのような人は決して弓や筆を忘れることがないのです。しかし、わかり易い例を挙げれば、親の見栄の為に嫌々ヴァイオリンを習わされている子どもや、周りに合わせて気乗りしないままに写生大会に参加した人ならば、あー確かに、肝心な物を忘れてしまいそう、と思えるのではないでしょうか。**

**イエス様が語られる賢い乙女と愚かな乙女の違いも、そこに在ります。賢い乙女は、ただ花婿を見つめ、心から愛する花婿と結婚式を挙げるそのシーンがいつも眼前にあって、そのことをいつも覚えているので、決して油壷を忘れてしまうといったうっかりミスをすることがないのです。ところが、わかり易い例を挙げれば、その愚かな乙女の一人が、実は、花婿を愛するから結婚するのではなくて、周りの人も結婚するから私も世間並みに結婚しよう、といった動機で結婚しようとするならば、油壷を忘れてしまうといったうっかりミスも起こりがちになってくることでしょう。**

**愚かな乙女の道行きは、苦労は多いですが祝福は少ないです。彼女らは、賢い乙女たちに「油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです」と頭を下げてお願いしなくてはなりません。そして断られて、自分の分の油を店に行って買って来なくてはなりません。そしてそうこうしているうちに婚宴の会場の戸が閉まってしまって、祝福にあずかることが出来ませんでした。将に踏んだり蹴ったりの成り行きでありますが、イエス様はこうはならないようにと、私たちを戒められておられるのです。**

**一方で、賢い乙女の道行きは、ただ愛する花婿を見つめ、その祝福の時に向かって、足を滑らせることなく、一歩一歩着実に祝福の道を前に進めているだけです。**

**聖書は、私たち人間一人ひとりは花嫁であり、その最愛の花婿はイエス様、という比喩を用いて、主イエスの愛を私たちに語っています。最愛の花婿イエス様は「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」とこの私に言われます。主の日に、最愛の人に再会出来るまで、私たちは、時に愚かな乙女の様であり、時に賢い乙女の様であります。そんな不完全な私たちですが、聖書の御言葉を聞いている限り、私たちは絶望することがありません。**

**なぜならば私たちは何時でもどこでも「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」と言うイエス様の御言葉を聞いて、イエス様に向き直り、イエス様に立ち帰ることが出来るからです。**

**イエス様を心から愛して近づいて来る人を、イエス様は全て受入れ、抱きかかえて下さいます。そして、私の愚かさや罪を打ち砕いて下さって赦して下さいます。**

**この地上を歩んでいます私たちは、祝福の主の日を迎える為の、準備の時を歩んでいます。私たちは過去に犯した罪に罪悪感を覚える必要はありません。私たちはいつも心を前に向けて、ひたすら主イエスを見つめて、賢く喜びに満ちた備えの日々を共に重ねて参りたいと願います。**

**祈り**

**父なる神よ、あなたは、私たち一人ひとりの愚かな歩みも、賢い歩みも、全て見守っていて下さいます。私たちがそのあなたに信頼して、あなたに全てを委ねて、一歩一歩を歩ませて下さい。そのようにして、私たちをあなたの光で照らし、賢い者たちへと導いて下さい。**

**あなたは熱情の神であり、この世の誰にもまして情け深く愛情に満ちた方です。主の日にあなたに祝福されて迎えられるよう、私たちのこの地上での準備をも、祝福し導いて下さい。**

**この地上で名をあげようとし、自分の野心に取り付かれる愚かな私たちをどうか、あなたの光のほうに向き直らせ、私たちの心と体を明るくして下さい。**

**争いと怒りの心に支配されてしまう愚かさから、私たちをお救い下さい。苦難の中にあっても、あなたに向かって光を見出して懸命に生きている兄弟姉妹を覚えます。どうか私たちが祈り合いながら、苦難の中の一筋の光である御子イエスに常に立ち帰ることが出来ますように、祝福し御守り下さい。**